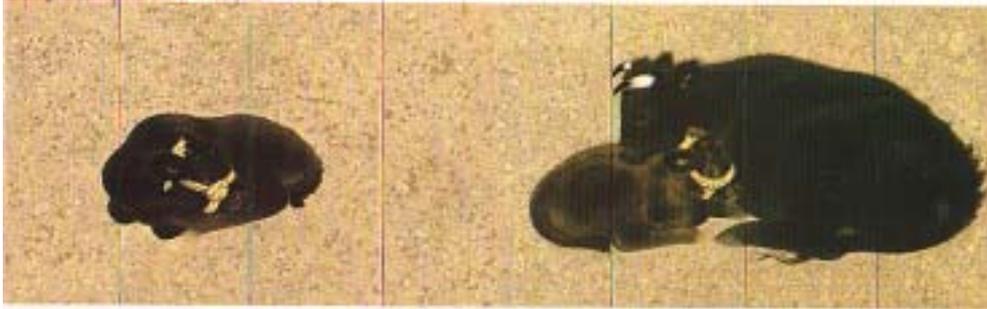


中学年 / 1 時間

鑑賞

**題材の目標** 作品から感じたことや思ったことを話し合い、作品のテーマや作者の心情を想像し、表現のよさを味わう。



「売られゆく仔牛」 和高 節二

**準備物** 【教師】鑑賞作品の複写、ふきだしカード、手紙カードなど  
【児童】筆記用具など

学習の展開例

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 事 項	評 価 規 準
<p>作品からうけた印象を話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何が描かれているのか</li> <li>・何をしているのか</li> </ul> <p>作品に描かれている仔牛や母牛の気持ちを想像する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・母牛の気持ち</li> <li>・母牛に甘える仔牛</li> <li>・離れて見ている仔牛</li> </ul> <p>絵に込めた作者の和高節二の心情を想像する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・農村に生きた画家</li> <li>・農家の牛（家族同様、大事な働き手、暮らしを支えるもの）</li> </ul> <p>母牛、仔牛、節二のいずれかに手紙を書く。</p> <p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・感想を交流する。</li> </ul>	<p>何を見てそう思ったのか、どうしてそう思ったのか児童の思いを引き出しながら、見方や感じ方を深めていく。</p> <p>作品に描かれているもの（ポーズや表情など）に視点をあてて見させ、牛の心情を想像させる。</p> <p>ふきだしに書くことにより、母牛と二頭の仔牛の気持ちに共感させる。</p> <p>準備できれば節二が描いた他の作品を紹介しながら、節二が生まれ育ったふるさとを愛し、共に生きた者たちを描いたことを知らせる。</p> <p>離れ離れになる仔牛と母牛の気持ちやそれを見守る節二の心情を想像しながら作品を味わわせる。</p>	<p>作品に描かれていることに関心をもつ。</p> <p>話したり、聞いたりして、自分の感じ方や見方を広げようとする。</p>

## 題材の意図と指導のポイント

### < 児童の発達段階との関連 >

この時期の児童は、作品に描かれている情景から想像をふくらませたり、描かれているものの心情に寄り添ったりして、見ることに関心をもち始めます。また、動物好きな児童も多く、牛が描かれているこの作品は親しみやすい題材でしょう。

### < 鑑賞の視点 >

左の屏風に描かれている仔牛と右の屏風の母親に甘えている仔牛を比較してみると互いに相手に視線を向けていることが分かります。視線や表情、様子などから仔

牛や母牛の心情を想像させましょう。

農村に生きた節二が共に生きるすべてのものにそそいだ深い愛情を画面から感じとってみましょう。

### < 指導の工夫及び配慮 >

作品を提示する時、2つを一度に提示するのか、左の屏風を先に提示していくのか提示方法を工夫してみましょう。例えば、左の屏風から見せ、仔牛の視線に注目させ、その視線の向こうにあるもう1つの屏風を見るという方法もあります。

表現と鑑賞を関連付けて指導する場合には、鑑賞後に生活の中で世話をしたりいっしょに遊んだりした身近な生き物などを題材にして表現しましょう。

## 「売られゆく仔牛」<sup>こうし</sup>

1961（昭和36）年

日本画《紙・彩色・屏風》、大きさ《各 172×264cm》

この作品は、左側の屏風に仔牛が1頭だけ、右側の屏風に仔牛と母牛を描いた四曲一双の屏風です。立派な角をもち、黒々とした毛並みの母牛とは対照的に、二頭の仔牛はまだまだ小さくて産毛で覆われているようです。しかし、この二頭の仔牛も売られて母牛と別れる時が近づいています。母牛にぴったり寄り添う仔牛。産毛も少し茶色がかって幼そうです。少し離れた所から、それをじっと見のつめているもう一頭の仔牛。母牛、仔牛はどんな気持ちでいるのでしょうか。

節二は、農村の暮らしに欠かせない家族の一員として大切に育てられた仔牛を、限りない愛情を込めて描いたことでしょう。

## わだか せつじ 和高 節二

和高節二〔1898（明治31）年～1990（平成2）年〕は、中国山地の山々に囲まれた広島県高田郡向原町（現在の安芸高田

市）に生まれました。小学校の頃から図画が好きで15歳の頃より画家を目指していました。絵の勉強のため東京で過ごした時期もありますが、生涯のほとんどをふるさとで過ごし、農村に生きる人々の生活や牛などの動物を好んで描きました。節二の代表的な作品の「牡牛（こっとい）」は、1940（昭和15）年の大きな展覧会で最高賞に輝いています。

節二はインタビューの中で次のように答えています。「・・・わしは農家に生まれた農民ですけんのう。ここにおいて、牛もおお〔飼〕とったんじゃ。農村の偉大さ、健康さ、力強さというものを表現するのが、農村に住む絵描きの仕事ですがの。牛は農家の宝えすけの、牛の力強さ、農民の力強さゆうものがの、作品の中に出てくれりゃいいと思うて・・・」（和高節二画集・野に生きる〔於・和高アトリエ、1987年4月 聞き手 八田典子『けんみん文化』編集者〕より）